

ぼくのかっこいい右うで

都城市立西小学校 四年 小田^{おだ} 弘翔^{ひろと}

ぼくは、生まれつき、右ひじから先がありません。お母さんと買い物に行くと、たくさんの人からの視線を感じたり、コソコソと話しをされたりします。ぼくは、そんな時、その場所からにげだしたくなります。なかにはわざわざのそきこんできて、

「オバケだー!!」

と言ってくる人もいます。その子どものお母さんがぼくから遠ざけるようにちがう場所に行って行ったり、口到人指し指をあてて

「シーーッ!!」

っというポーズをとったりする事もあります。ぼくは、”シロシロ見ないでほしい”というよりも、右うでのが気になるなら、”どうしたのかを聞いてほしい”と思います。聞いてくれたら、”ぼくがお母さんのおなかの中にいる時にケガをしたこと”や、”右手はないけど毎日楽しくすごしている事”などを話すこともできると思います。

そして、みんなはかんたんにできるけど、ぼくにはむずかしくて、やるのに時間がかかってしまう事がたくさんあります。なので、友達にからかわれたり、バカにされる事もたくさんあります。その時は泣きませんが、人の見ていない時には泣いています。ぼくは心の中で”くそー。ぜったい見返してやる。”

と、いつも自分に言いかけせています。だから、今いじょうにがんばってやる!という気持ちになります。なので、いろいろな事ができるようになります。

この前、なかの良い友達がお手紙をくれました。

”さか上がりができてすごいな!”

”スポーツがとくいだね!”

”自分の意見がはっきり言えるのがかっこいいね”

”計算が速くてすごいな!”

など、ぼくをほめてくれる内ようでした。そこでぼくは、ほめられて、はげまされて、またそれいじょうにゆう気が出ていろいろな事にちょう戦する事ができます。そんな友達を大切にしないと。というも思います。

がんばっているうちに、出来る事が少しずつふえつづけています。お母さんが

「弘翔はすごいよ。どんな事があってもがんばって練習もするし、かた手でもたくさんをとを成しとげるし、何事もあきらめずがんばる所が弘翔のいいところだよ。弘翔は自まんのむす子だよ。」

と、言ってくれるのでとてもうれしくなります。

ぼくは、右ひじから先がなく、たくさんの人から、からかわれたりシロシロ見られたり手のないマネをされることが多いけれど、される人の気持ちに気づいてほしいと思います。くやしいです。悲しいです。人はみんな平等です。なので、みんなで、なか良く、楽しく、思いやりや親切な気持ちを持ちながら、ぼくも考えながらすごしていきたいと思います。

ぼくは、なんでもできる

”ぼくのかっこいい右うで”
が大好きです。

聞いてほしかったなやみごと

都城市立南小学校 五年 北郷 優斗

ぼくには、なやみ事がありました。だれにそうだんしていいかわからなくて、夜寝る時に頭からふとんをかぶって、いろいろ考えました。「もしかしたら」と考えたら、よけいに心配になって、こわくなって、なみだが止まらなくなりました。少し苦しくなったからふとんから顔を出して、となりで寝ている中学生の兄を見たら、ぼくと同じように頭からふとんをかぶっていました。時々鼻をすする音がしたので、もしかすると同じことを考えているのかもしれないと思って、ぼくは

「泣いてるの？」

と聞きました。返事がなかったので、もう一度同じことを聞いたたら、

「だって、お母さんがコロナだったらどうしよう。」

という声が聞こえたので、ぼくも

「どうしよう。」

と言って二人で泣きました。

ぼくの母の周りで、コロナに感染した人が出てしまったから、ぼくの母はPCR検査を受けることになりました。初めは、いつもはいそがしそうにしている母がずっと家にいてくれるのがうれしくて、このまま母がコロナの検査が陰性で、しばらく家にいてくれたらラッキーだなと思っていましたが、時間が経つにつれて「もしお母さんがコロナにかかってしまったらどうしよう」という不安な気持ちでいっぱいになりました。ごはんはどうしよう、洗たくはどうしよう、買い物はどうしよう。お母さんは、どうなるんだろう。入院することになるのかな。それともホテルに行くのかな。ぼくたちは子どもだけで家にいることになるのかな。お母さんがもしコロナでそのことが周りに知られたら、どうなるんだろう。新聞やニュースで、「ひぼう・中傷」という言葉を聞いたことがあるけれど、悪いのはコロナで、何も悪いことをしたわけじゃない人が、「あの人コロナにかかったらしいよ。今度会っても話すのをやめよう。」とか、「あなたのせいだ、コロナが広がった。だから仕事をやめてください。」とか、家に石が投げこまれたり、かべに落書きをされたり。ぼくは、それが自分のお母さんに起きたらどうしようと思うと、不安でどうしようもなくなりました。

ぼくは、新型コロナウイルスがこわいです。感染したらどうなるのか、毎日テレビで流れているから、苦しそうだとか高い熱が出るんだとか、一人で入院するのはいやだなと思っていたけれど、身近な人が「もしかすると感染しているかもしれない」という状況になってはじめて、感染することもおそろしいけれど、感染したことで周りの人から何か言われてしまうことはもっとこわいなと思うようになりました。

今年の夏休みは去年よりも感染者数が多くて、県の緊急事態宣言も出ています。いつだれが感染してもおかしくない状況なのだから、感染した人が非難されるのはまちがっていると思います。それに、感染してしまった人はとても不安だと思われ、その家族もすごく心配していると思います。人の命がかかっている状況なのに、協力したり助け合ったりすることができず、感染した人を差別したり、中傷することは、この世界をもっと悪い方向に導くことになると思います。それに、差別することが当たり前になってしまったら、コロナに感染した疑いがあっても、病院に行くのをためらって、そのことが感染拡大につながってしまうのではないかと思えます。ぼくたちは、病気にかかった人たちとその周りにいる人たちを傷つけ、仲間外れにすることの危険性をもっと考える必要があると思います。

ぼくの母は、PCR検査は陰性でした。ぼくはこの出来事で、新型コロナウイルスを身近に感じました。そして、「コロナによるいじめや差別について」、「もし自分や大切な家族がこんなことをされたらどうしよう」という想像をすることだけでも辛かったので、絶対に起こって欲しくないと思いました。

コロナによるひぼう・中傷については、県知事や市長が会見でいつも話しています。ぼくは、そういった人たちが呼びかけるだけでなく、ぼくたち自身も注意し合えるようになりたいたいと思います。正しいかどうかをわからないうわさを広げてしまうのは、たとえコロナが治ったとしてもその人の心の傷を一生残してしまうことになると思います。かかった人は何も悪くないから、みんなを守って、みんなで乗り越えられる社会になってほしいです。また、ぼくがこの作文をおしてなやんでいたことが打ち明けられたように、今、新型コロナウイルスによって不安やなやみをかかえている人たちがもっと気持ちを打ち明けられるようになってほしいです。そして、それに寄りそう人たちがもっと増えることを願っています。

人けんの大切さ

宮崎市立小松台小学校 五年 富永 真緒

わたしの弟にはダウン症という障がいがあります。弟は年長だけれど、まだうまくしゃべることがあまりできません。まわりの人たちや友達に「この子、何才？」と聞かれることがあります。「六才だよ」と教えると、たいていの人がびっくりします。びっくりするまわりの人たちの考えもよく分かります。それは、あまり言うことを聞かないし、しゃがんで動かなくなることもあるからです。わたしもまわりの人だったらびっくりすると思います。けどたまに、弟のことを見て、にらんだりふかいそうにしていたりする人もいます。わたしはそれを見るといつもごく悲しくなります。一部のまわりの人から見ると、弟はめいわくなそんざいだと思われるかもしれません。わたしは事情も分かっているまいわりの人たちに弟のことを悪く思うけんりはないと思います。その人たちの兄弟とか親せきの人がそういうことを思われたらどんな気持ちになるか一度考えてみてほしいです。

でも弟にだっていいところはたくさんあります。笑顔がとてもかわいくて、いつも楽しそうに家族にいるだけで、みんなが元気になる場所なんです。

わたしは、人を見た目ではんだんしてほしくありません。弟のことをダウン症だから、どうせできないとか、ダウン症ってかわいそうとか言われたくもないし、思われたくありません。わたしは弟がみんなを元気にしてくれる太陽みたいだと思っています。なぜかというと、いつもおもしろい行動をして、みんなを楽しませてくれるからです。わたしは、弟が生まれて、じんけんの大切さが分かったような気がします。どうしたことかというところ、じんけんとは、いろんな立場、例えば、障がい者や外国人の人など、どんな人でもけんりをもつことができ、人は平等であることを伝えるものかなあと思ったからです。一人一人のじんけんをそんちょうすることが、だれかを助けたり、だれかを守ったりすることにつながり、人を見た目ではんだんすることがなくなればいいと思いました。わたしがじんけんの大切さについて考えたのは、きずつく人やきずつける人が一人でもへってほしいと思ったからです。人は、人のいいところより、悪いところが目につきやすいので、あのいやだなあと思う人もぜったいにいると思います。でもそれを、声に出さずに、みんながだれにでもやさしく接したら、どんな人でも生きやすい世の中になっていくのになあと感じました。そんな温かい世界になるのが楽しみです。そして、「差別」という言葉がこの世から早く消えてほしいです。

おじいちゃんはおこってないよ

宮崎市立宮崎西小学校

四年

岩切

奏

ぼくのおじいちゃんは、八十五才です。おじいちゃんは畑の野菜を育てたり、庭の植木の手入れをする事が好きで、天気の良い日は一日中外にいます。おじいちゃんすごいのは、高い木の上に登って、庭木を切るところです。どんなに高い木も人にたのまず、自分で切ります。木登りができるおじいちゃんはすごいです。

そんな、とても元気のいいおじいちゃんですが、耳が聞こえにくいです。おじいちゃん、ほちょうきをつけています。いつもつけてはいません。買い物に出かけたり、病院に行ったりするときにつけています。家では、めったにつけていません。たぶん家だと、みんなが分かかっていて大きな声で話してくれるし、家族以外の人とは話さないからだと思います。おじいちゃんがテレビをみるときは、いつも家中に聞こえるくらいの大音量です。

ぼくがおじいちゃんと話をするときは、なるべく大きな声で話すようにします。それでも聞こえないときは、おじいちゃんが聞こえるまで何度もくり返します。おじいちゃんは聞こえないと「なんて？」

と、大きな声で聞き返します。その時のおじいちゃんはおこっているように見えます。ぼくの友達が遊びに来た時に、友達がいさつをした声をおじいちゃんは、なんと言ったか聞きとれずに、

「なんて？」

と、大きな声で聞き返していました。友達は何も言わずに向こうに行き、ぼくに「こわかった。」

と言いました。あの時にぼくは何も言わなかったけど、後からおこってないよと教えてあげれば良かったと思います。大きな声で言うと、みんなおこっているように聞こえるようです。

もし、耳が聞こえにくい人が町に出たときに、ほちょうきをわすれてもだいじょうぶなように『わたしは耳が聞こえにくいです』というカードがあったらいいのになと思います。にんぶさんにあるカードのような物です。それから、お年よりと話すときは、みんな大きな声でやさしく話しかけてあげるといいなと思います。

き械もいろいろ進化してもっと良いほちょうきができたり、スマートフォンがスピーカーの代わりになるなど、かんたんに大きな声を出さなくても会話ができるようになると思います。

おじいちゃんの耳が良く聞こえるようになるよ、おこっているように見えたりするかんちがいはなくならないと思います。面白い話もできるよになって、今よりも楽しくなると思います。

ぼくに今できる事は、周りの人に、おとしよりが聞こえづらいことを教えてあげる事です。もし、また友達がおじいちゃんがおこっているように感じているときは、おこってないよ聞こえにくいんだよと教えてあげたいです。